

35 歳

鮮烈だ

鳥取県倉吉市立西郷小学校 松本勝男

事実からの出発。

一つの事実が世の中を動かす。

一つの事実が大きく問題を提起する。

子どもの事実を素直に見て、その結果を大切にしたい。

事実こそ最も強いのである。

かつて、渡辺昇一氏が教科書問題について論究したことがある。

侵略問題である。

渡辺氏はすべての教科書を調べ、侵略を進出にかえた事実はないことを産経新聞に載せた。

このことで、外交問題は霧のように消えて行った。

従軍慰安婦の問題もそうである。

東大の藤岡信勝氏がその事実はない。当時の状況が問題であったのだと述べている。

渡辺昇一氏も以前からあれはデッチあげだ、と述べていた。

が、それが事実かどうか。

過去のことであればに難しい。

しかし、一つの事実で大きく問題がとき明かされるのである。

事実の重みを感じる。教室の現実に忠実でありたいものだ。

事実を探求する目をもちたいし、耳をもちたい。

投稿原稿下書き

一気に書く。そして、時間をおいて追加、修正する。

原稿用紙のマス目が無視された気迫の字。

走り書きがすごい。

字も芸術的であるとも言える。

改行マークあり、訂正文あり。

原稿用紙一枚に10カ所以上のチェックが入っている。
向山氏のにじみ出るような力強い文章が私の胸を打つ。
とにかく、一気に書いたものだと思う。

そして、数日後か、
思考を練りながら、修正したものだろうと思う。

ノートに横書きにされた論文も太い筆跡である。
万年筆で書かれたものか。
ボールペンか。
執念とも言える思いがここでもまた伝わってくる。

- ◇「出口」「論争」を興味深く見守ってきた。 下書き原稿である。
- ◇「出口」論争を注意深く見守ってきた。 『すぐれた授業への疑い』より
- ◇出口「論争」を注意深く見守ってきた。 『現代教育科学』より

書き出しの一点ではあるが、このように変化している。

興味が、注意に変わっているところは、第三者的立場から、当事者としての立場に変わると意識の変化がそのようにさせたのだと考える。

論を組み立てる。

プロットを抜粋する。(『すぐれた授業への疑い』より)

◇「出口」論争—教室からの発言

1 「出口」論争への期待と失望

吉田氏の論文に対する失望

斎藤喜博氏に対する敬意

宇佐美氏の論文に対する驚き

吉田氏の研究者としての責任の欠如

小学校の教師として意見を述べるという決意

2 わたしの「出口」の授業

授業したこと

1 時間目は「森の出口」の意味について討論しなさい。

2 時間目は「やっ」と感じたのは誰か討論しなさい。

3時間目は作文をしたこと

「やっ」ということに対しての子どもの考え。2人
「森の出口」の意味についての子どものノート。4人
宇佐美氏の批判は妥当性があると言えること。

3 斎藤実践に対する子どもの論評

斎藤氏の「出口」についての記述を印刷して渡し、
「この文について論評しなさい。」と作文を書かせたこと。
(斎藤氏には好意を持っていること)

子どもの作文

名取伸子

作家有実子

上田良樹

東ようこ

野口 毅

小沢明子

篠原真紀

天明敏行

鈴木 元

4 「出口」の授業の価値と役割

斎藤氏の授業に対する子どもの批判

討論ではない。脅迫授業だ。

出口の授業はすぐれたものとは思わない。

斎藤喜博氏の価値

優れた授業の創造は、研究者と教師の共同の仕事である。

子どもの作文を入れる。それが事実なのである。

子どもが述べること、書くことが事実なのである。

向山氏は、分析批評で子どもを鍛えた。

その結果が、出口の授業の矛盾をつくことになった。

授業し、子どもに考えさせ、検討する。

いわゆる、追試である。

学校の教師が、論を展開するときは、必ず、子供の事実をくぐらせる必要がある。
る。

事実があれば、何物にも負けないのである。

小学校の教師が大学の先生に食ってかかる。

このようなことは、向山氏が初めてあった。

反批判するときはどうするか。

◇時間をかけ、気のはやるのが遠のいてから書き始めました。

時間をおき、精神状態が安定してから、書くのが原則のようである。

向山氏にしてしかりである。

凡人である私なら、一年以上間をおく必要がありそうだ。

もっとも、反批判をもらうような論文を書けるかどうかこそ問題なのだが。

◇高橋氏は私のクラスの子どものノートについて次のように言及された。

「F君のノート「出口は高木層から低木層にうつり、マント群落が変わる一点である。口というのはがま口のように穴のような意味もあるが、この場合は線の意味である。」は注目すべきである。東京の子どもの書物勉強だから誤解のあるのはやむを得ないが、それにしてもすばらしい考えである。もしもこの発言が討論中にあり、向山氏が森の正しいイメージでF君の発言を投げかけたのだったら、結果はこんなにみすぼらしくならなかっただろうが、口を介入させないのが向山氏の主義だからしかたない。」

授業のときに「口を介入しない」のは私の主義ではない。「口を介入しない」ことを主義とした授業は小学校ではあり得ない。「森の出口」の3時間の授業では「口を介入しなかった」だけのことである。

反論するときには、必ず、関係文章をそのまま掲載している。

これが、反論の鉄則なのである。

松本勝男（まつもと かつお）＝法則化サークル 山陰なしの会